

『大鏡』を読む会

2020/01/01

『続日本後紀』は2019年12月で読了、2020年1月から『大鏡』がスタートします。『大鏡』は、「四鏡（しきょう）」（大鏡・今鏡・水鏡・増鏡）の最初の作品で、書名『大鏡』とは、「歴史を明らかに映し出す優れた鏡」の意味です。

仁明天皇に続く、文徳天皇から後一条天皇の万寿2年（1025）に至るまで、14代176年間の平安時代最盛期、藤原氏の栄華を軸として、大宅世継（190歳）と夏山繁樹（180歳）という長命な二人が語合い、それを若侍が批評する対話形式で書かれている、人物や事件を中心とした紀伝体の歴史物語です。

テキストの『大鏡』は、古典の大衆への浸透を目標に、平明を旨とした現代語訳なので、適宜に「段」を設け、内容を要約する「見出し」をつけ、丁寧なルビで読み易く、人名・地名・主要な有職故実・事件等の解説をしています。

毎回15頁程度を、段落毎に味わいながら、同時代の『愚管抄』『伊勢物語』『栄華物語』『今昔物語』『蜻蛉日記』等を参考しながら読み進めます。

新しくスタートするこの機会に、是非ご参加をお待ちしております。

定例会 日 時：毎月第4水曜日 午後1時30分～
場 所：町田市立中央図書館 6階中集会室



女君たちは、都にお残りになることになり、父君の後を道い申して、泣き絶していらつしやるので、「小さい子供はさしつかえなからう」と、朝臣も父君といっしょに下ることをお許しになったことでした。朝臣のご恩恵がきわめて増進でありになりましたので、そのお手紙たちも、同じ所に流すということはなさらないのでした。道真公は、都に留まる御君たち、別々に流される御君たちの、あれやこれやにつけて、ひどく悲しくお思いになつて、折から咲いているお庭さきの梅の花をこぼれになつて、

こち吹かばにはひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな

春になつて寒風が吹いたら、それに托してよい匂いを私の配所の寝袋まで運んでよしくくれ、梅の花よ、主人の私がないからといって、春が来ても咲くのを忘れてはならないよ。

とお詠みになり、また宇多天皇に次の歌をさし上げなさいました。

流れゆくわれはみくづとなりはてぬ君しがらみとなりてことめよ

大平権助は流とされ、親等の配所へ流れていく私は、水船と同様になつてしまいました。わが君よ、梅となつてこの水船をおとめください。

無実の罪によつて、このように、重い罰をお受けになることを、ひじょうにご悲願になつて、山崎まで来て船にお乗りになるとき、そのままご出家なさいましたが、都がだんだん遠くなるにつれて、しみじみと心細くお思ひになつて、北の方に、